

ショートショート（習作）

伊香怜一郎

妻よ

お前が死んでから、今日でちょうど三年が経つ。言葉に枕をうつならば、早くもというべきか。あるいは実感としては確かにそれその通り、飛ぶように日が過ぎたように思えなくもないが、それも今から振り返ってみればの都合のいい話。実情はというと、日がな一日ボンヤリ過ごしていたところ、おや何時の間にか、あれから三年かい、というのが精々ほんとのところ。この物の役にも立たぬ愚昧さだけは、お前が生きてた頃から変わらない。

平生、事もなしとは言うものの、どういうことか腹立たしいことだけは数多い。先月も、喜寿の祝いとやらのハガキが役所から来たので、何がめでたいものかと、玄関先で破り捨ててやった。せんぞ流行りの平均寿命の高齢化など、医は仁術ならぬ、医は算術の繁盛医が、我が銭増えるが楽しみに、つつい銭の元となるジジババの余生まで利殖してしまったのが誤りの始まりで、こうなると悪いのは医者か、それともそれでも生きることにしがみつくジジババか。あんまり腹が立ったのと、どうも周りからみれば自分も生にしがみつく方の分際に見えるかもしれず、それが甚だ癪なのとで、もう少し普段から意識的に死ぬ方面寄りに生きていこうと、最近煙草をやるようになった。大して旨くもナシ。

思えば、神も仏も信じぬ俺は、死ぬことは無になることと考えていたが、お前の死を、自分の実感に即して考えてみるに、精神的には記憶が残り、物質的には骨が残った。まま愚考するに、死ぬことの本質は、どうやら無になることではなく、あるべきカタチを変えることにあるようだ。だとすれば、この不自由な枯骨をはや打ち捨てた今のお前はさぞや痛快な気分の違いなく、羨ましくさえある。もっとも、お前はそんな俺を相変わらずだと笑うかもしれないが、まあ、勝手に笑いやがれ。その愉快の余得にあずかる方が、なまじっか下手な坊主の読経を聞くよりも、はるかに供養のタネになりそうだ。

そうそう、帰る前に、ひとつ言い忘れていたことがある。まあ聞け。つまらない愚痴だ。この三年間で身にしみて知ったことなのだが、どうも、お前がいない毎日は寂しいものだ。

妻よ。

今日は、命日、オメデトウ!